郷土の文化遺産を志向した書道教育の展開例

－長野県上伊那郡辰野町の「龍渓硯」に着目して－

信州大学　小林比出代

1．はじめに

信州大学の中期目標の一つに「豊かな地域社会の創造に向けての協働と貢献」が掲げられ、「地域を志向した教育・研究に関する目標」や「地域に根差した研究と人材育成を実施し、地域振興に貢献する。」ことが明文化されている。また、文部科学省から採択された独自の教育・地域連携活動の支援事業「地(知)の拠点整備事業（大学 COC）」も実施している。この事業は、地域の人材及びフィールドを活用した教育活動や、地域の人材育成等の推進に貢献するプログラムの支援を目的とする。

書道教育における地域との連携や、地域の文化遺産に関する研究課題に鑑みたところ、長野県知事指定伝統的工芸品「龍渓硯」の存在と趨勢に行き当たった。本実践研究は、先述の COC 事業として採択していただき、当該の研究教育補助を受けて実施したものである。

2．龍渓硯の概説　―本実践研究の背景―

最初に、以下の参考資料を引用することにより、龍渓硯の歴史、特徴、趨勢を概説する。

「龍渓硯の歴史

江戸時代の末期、現在の辰野町瀬戸・上島地区で砥石を掘り作間稼ぎをしていましたが、砥石になる石は少なく、黒い石ばかりが採れました。当時横川の一之瀬で寺子屋の師匠をしていた淵井椿斉がこの石に目をつけ硯を作って使用してみると、墨のおりがとても良かったので、村人たちに硯作りをすすめました。当時は高遠硯と呼ばれていたそうです。

昭和 10 年、時の首相犬養木堂翁に認められ、長野県知事大村清一により「龍渓石」と命名されました。そしてこの石で作られた硯を「龍渓硯」といいます。〔以下略〕

龍渓硯の特徴

龍渓石の石質は「黒雲母粘板岩」といい、石齢２億年以上と言われています。キメが細かく、硬くなく、柔らかすぎず、発墨に適した石質のため硯に適しています。また、自然の模様が表面を彩っていますが、第二酸化鉄でできており 5000 万年以上の時が作り上げた芸術品です。

この龍渓石に「使いやすさ」「美しさ」を考え、受け継がれた伝統の技術を注ぎ製作しています。〔以下略〕

龍渓硯の起源（上伊那郡誌原文による）

この石で初めて硯を作ったのは、淵井椿斉であると言われています。

現在の箕輪町長岡に生まれた淵井椿斉は、江戸に遊学し、帰郷後川島地区一之瀬で医業を営み、一方で村の子供たちに学問を授けていた人物で、明治 18 年に故郷で没しました。

太平洋戦争後、辰野町翠川氏等の努力によりその声価が再び知られるようになりました。」

（「龍渓硯」龍渓硯本舗 翠川堂
龍渓硯振興会作成パンフレット（平成 25 年度地場産業活性化戦略支援事業支援））

写真１　龍渓硯（翠川希石氏作）の側面

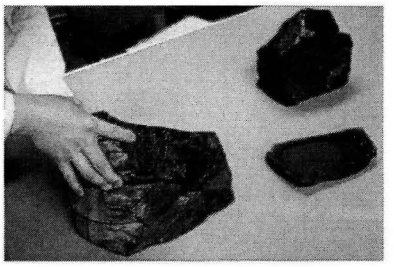


写真２　龍渓硯（翠川希石氏作）

「地元の上伊那郡辰野町では、江戸時代より龍渓硯がつくられています。その石齢は二億年以上といわれ、石質が緻密で粒子の細かい墨が磨れると言われます。昭和 10 年に当時の大村県知事によって龍渓石と名づけられました。『龍』は天竜川系で産出することから、『渓』は天竜川系の横川川の渓流のその美しさからという説と、端渓硯の渓をとったという説があります。サビの色が美しく、金色やこげ茶色、稀に白色も出ます。硯だけでなく、一輪ざし、筆立て、朱肉入れ、文鎮等つくられていますが、サビの美しさから鑑賞石としての飾り石も存在感のあるものがつくられています。

高遠とも縁があり、江戸時代末期に高遠藩が全ての石を所有し、山梨の雨畑の硯職人を招き指導をさせて硯をつくらせました。それが、高遠硯、鍋倉硯として売られるようになりました。明治初期は、数十名の硯職人がいたようですが、大正時代になり衰退していきます。しかし、昭和に入り書道がだんだん盛んになり、翠川さん深澤さん等も山梨から移住し、硯をつくりはじめ復興しました。多いときには七軒（川口、五味、田中、田中、望月、翠川、深澤）あったが、二軒だけになってしまいました。そして、二ヶ月前突然に翠川さんが倒れ、亡くなってしまいました。

〔中略〕

我々書道教育に携わる者として、硯だけでなく書を取り巻く文化を守っていくことが大切だと考えます。小中学校では、硯は墨汁を入れる入れ物として使われているのが現状です。本来の使い方であるように、生徒が硯で墨を磨るという体験をさせる必要があると考えます。」

（第 39 回全日本高等学校書道教育研究会長野大会分科会口頭発表資料
「目の前の生徒をどう育てるか ～体験学習や本物を見せる取り組み～」
長野県高遠高等学校　泉逸男（2014.11））

３．実践概要及び工程

次に、本研究での実践内容における、学生たちの具体的な調査の工程や方法に関して列記する。

a. 龍渓石の採石場と龍渓硯の工房（日本工芸会正会員 故 翠川希石（本名 袈裟美）氏の「龍渓硯本舗翠川硯店」）を訪問し、以下の調査を行う。［2015（平成 27）年 10 月 24 日（土）］
　○龍渓石や龍渓硯の歴史（龍渓石の石質／龍渓石の産出から龍渓硯誕生への変遷／龍渓硯の現在等
　○現存する龍渓硯の鑑賞とその特質の検証
　○龍渓石原石から龍渓硯完成までの工程

b. 翠川希石氏から龍渓硯の制作技法を直接学ばれた、長野県高遠高等学校教諭 泉逸男先生を講師にお招きし、実際に龍渓石原石を用いて龍渓硯を制作する。［2015（平成 27）年 10 月 31 日（土）於信州大学教育学部／※10 月 25 日～30 日の間に、前もって鑿（刀）の扱い方に慣れ、かつ、各自硯の大まかな体裁を決めて、硯の裏面の据わりをよくするための刀を加えておく。］

写真３　硯裏面に刀を加える

c. 上記「a.」での調査内容と「b.」での制作過程を記録し、完成した作品とともに展示発表する。[2016（平成 28）年２月 17 日（水）～21 日（日）　於信濃教育博物館（長野市）]

４．実践成果の教育的な展開

「３」を受け、本研究の実践成果における教育的な展開方法、及び地域との連携や研究の新規性に関する工夫等について列挙する。

【2015（平成 27）年度】

○「３」の内容は、当該年度の後期に開講する授業「書論・鑑賞」の中で、文房四宝に関する研究の一環として、郷土の貴重な文化遺産について探究することを目的に展開する。具体的には、「３」の「a.」と「b.」を正規の授業時間外に設定する「特別授業」の形で実施し、「c.」の展示発表準備は１～２月の授業内や自主ゼミの形式で行う。

○本研究結果は、当該年度末に開催する「平成二十七年度 信州大学教育学部卒業書道展」（於信濃教育博物館 第１展示室及びロビー）において展示発表する。会場となる信濃教育博物館は、地域の皆さんの利用をはじめ、とりわけ教育関係者の利用率が大変に高く、また、卒業書道展の開催時期が年度末であることも相まって、多くの来場者が想定される。

【2016（平成 28）年度以降】

本学部を卒業する学生たちが、それぞれの赴任先（勤務校やその地域）で、本研究内容を発展的に実践遂行していくことが期待できる。この研究は学生の教育活動にもつながり、さらには知識技能の一部が継承されることも望まれる。

５．展示発表の様子　―完成した龍渓硯と学生が作成した展示パネル―

「３」の「b.」で制作した硯と「c.」で作成したパネルを展示発表した卒業書道展の様子と、実際の硯及び展示パネルの写真を掲載する。

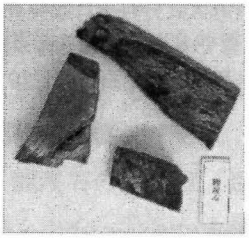


写真４

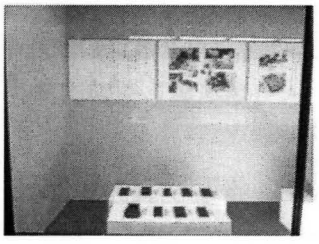


写真５

【本頁】写真４　龍渓石原石

写真５　卒業書道展での展示（下方に硯）

写真６　完成した龍渓硯

【次頁】写真７（上段）　卒業書道展での展示

※下段以降は実際に展示したパネル（11 枚）

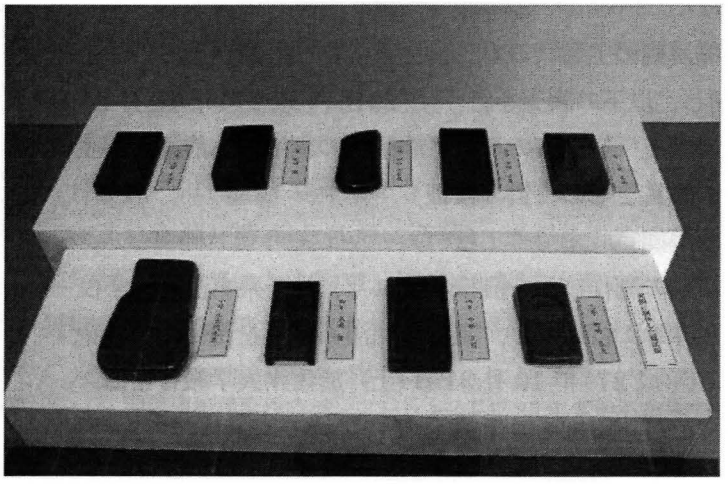


写真６

写真７　卒業書道展での展示（信濃教育博物館 第１展示室へ続くロビーにて）

龍渓硯の歴史と現状

江戸時代、上島村（現辰野町上島地区）で産出した石が、硯作りに適していました。そこに高遠藩が目をつけ、その石をすべて所有しました。その上で、甲州（現山梨県）の雨畑から硯工たちを招き、硯を作らせました。その硯は高く評価され、「高遠硯」「伊那硯」「鍋倉硯」などと呼ばれました。

大正期に、辰野町で採れる良質の石は「龍渓石」と名づけられました。龍渓石で作られる硯、それが「龍渓硯」です。その性質の良さから多くの人気を獲得しました。一時は海外からの筆記具の輸入や普及により、硯の需要の低下と共に龍渓硯の生産も衰退しましたが、昭和に入ると再び書道人気が高まり、龍渓硯はより一層の隆盛を見せるようになりました。また、山梨県から龍渓石を求め、多くの硯工が移住してきました。当初は七軒あった龍渓硯の工房ですが、徐々に減少していき二軒が残り、さらに昨年、翠川袈裟美（号　希石）氏（日本工芸会正会員）が亡くなったことにより、龍渓硯を作る硯工が不足し、龍渓硯は幻の硯となりつつあります。

辰野町の位置

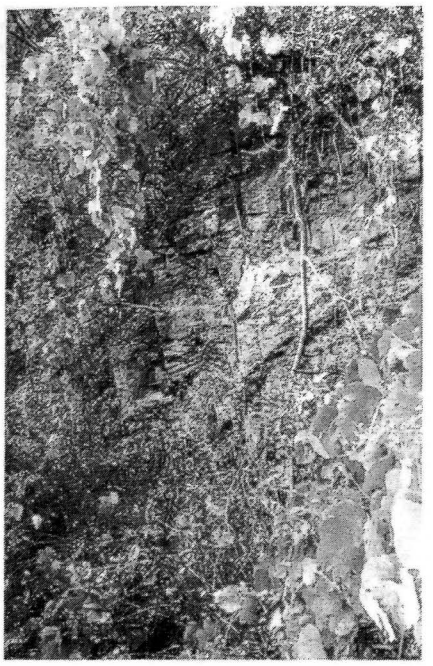
（出典：ウィキペディア）

一　実地調査

1　採石地見学

辰野駅から車で十五分ほど、山の中へ進んでいくと翠川氏が龍渓石を採石していた場所に着きました。木々がうっそうと生い茂り、人気のない景色からは寂しさを感じました。硯工の中には、原石を安定供給するため山ごと買う人もいるそうです。

龍渓石の中でも、硯にできる石とできない石があります。それを見極めることが、龍渓硯をつくる第一歩となります。



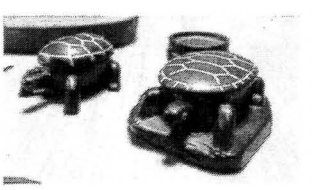
龍渓石の採石場

2　翠川堂硯店の見学

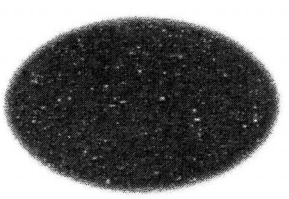
―翠川ゆり子さんのお話―

龍渓硯の原石である龍渓石は、石によって色の付き方、濃さなどが様々で全てが一品物。龍渓石のほんの一部だけを硯に使うことができます。龍渓硯は鋒鋩※が細かく、墨が良く磨れるという性質を持っています。その価値は広く認められていて、日本の首相が韓国の大統領に贈ったこともあったそうです。

翠川袈裟美（号　希石）氏の作品もいくつか見せていただきました。大きさ、形は様々で、蓋付きのものや装飾の加えられたものもあり、翠川氏の創造力にも驚きました。蓋付きの硯は主に贈答品として作られていたものです。装飾にはカエル、カメなどの水と関連する生き物が多くあしらわれていました。



右：カメの形をした水差し
左：カメの形をした硯



龍渓硯の鋒鋩
細かくきらきらと輝いている。

撮影協力：竹下欣宏先生

※墨を磨る面に密立している微粒子のことをいう。この微粒子の密度が高いほど、墨がよく磨れる。（参考：『書道辞典』東京堂出版）

―翠川袈裟美（号　希石）氏について―

翠川氏は中学を卒業して間もなく、家業の硯工を受け継ぎました。山梨から長野県辰野町に移住し、五〇年以上硯を作り続けていました。翠川氏は見た目の良さだけではなく、まず使えることを重視した硯を目指していました。その卓越した技能と、硯の美しさが認められ、平成九年には卓越技術者知事表彰「信州の名工」を受賞しました。龍渓石を元に、硯だけでなく花器、筆立て、文鎮、ペンダントなどの様々な製品を生み出してきました。

（長野県デジタルアーカイブ推進事業「郷土風」より）

硯について語る翠川氏

一つひとつ丁寧に作られた龍渓硯

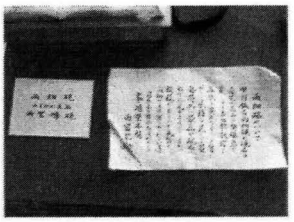
3　泉逸男先生のお話　於辰野高校

高遠高校書道科の泉逸男（号　石心）先生から、特別に硯についての講義をしていただきました。泉先生所蔵の硯の数々を実際に見ながら、それぞれの硯に関するエピソードを交えて、話をしていただきました。

泉先生所蔵の硯

泉先生の講義

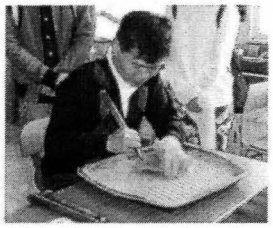
泉先生は、硯を収集するだけでなく、実際に制作もされています。龍渓硯を作る技法について、泉先生から直接ご指導を受けました。龍渓硯について、石を割る道具を見せていただいたり、陸（硯の浅い部分。墨を磨るところ）と海（硯の深くなっている部分）とでは、別の砥石で削ることを教えていただいたりしました。



上：雨畑硯の説明
下：雨畑硯

龍渓硯以外のコレクションでは、中国で最高級品である端渓硯や、山梨県で生産される雨畑硯を見せていただきました。端渓硯から一文字取って龍渓硯と名付けた、という説もあります。また、山梨県の雨畑硯とも龍渓硯は関係が深く、雨畑で硯に適する石が採れなくなってから、硯工の方々が多く辰野町に移住してきた、という記録が残っているそうです。

講義の途中で、硯を作る際の「硯彫り」という工程の体験をしました。泉先生はスムーズにノミを運んでいましたが、実際に体験してみると、全く上手くできず、コツをつかむのに大変苦労しました。



硯制作指導の様子

二　制作

1　制作工程

①石取り

トンカチとノミで龍渓石を採石する。この時点で硯になる石かどうか見極める。

②石割り

石を硯の大きさに割り、硯の完成形を見出す。石は縦に割れるため、蓋つきの硯を作ることもできる。石を日に当てると、黒雲母の粒が見える。

③石造り

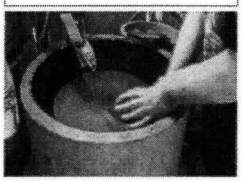
切り出した石を研いで、面を平らにする。面を平らにしたあと、角をとるため、砥石を使って削る。

④硯彫り

三種類のノミを使って彫る。硯の陸・海の、それぞれを彫った後、縁を彫る。次に、硯の裏を彫って、硯自体の据わりをよくする。

石取り

石割り



石造り

硯彫り

⑤磨き

砥石を使って硯面を整える。その後、紙ヤスリでよりなめらかに仕上げる。

⑥彫刻

硯の蓋に彫刻をする。装飾として、蒔絵などを入れる。写真では、カエルをデザインした彫刻を施している。彫刻は、水に関係する生物が多い。

⑦虫あなふさぎ

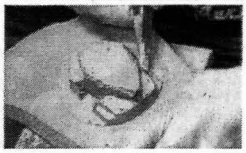
墨を漆で練って、それを薄く塗り小さな穴をふさぐ。一日置いたあと、サンドペーパーを使い、表面を磨く。

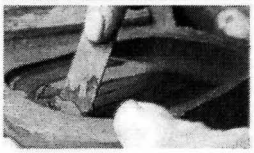
⑧漆塗り

テレビン油で生漆をのばし、硯面以外を塗る。硯面は墨を磨るために必要なので、塗らない。数日乾燥させて完成。

（『長野県デジタルアーカイブ推進事業　龍渓硯』より）

磨き


彫刻


虫あなふさぎ

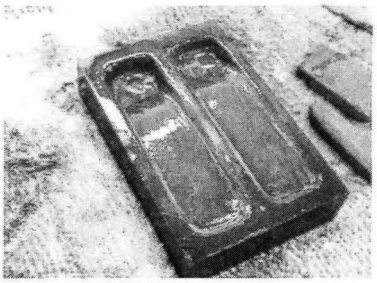
漆塗り

2　制作後の感想

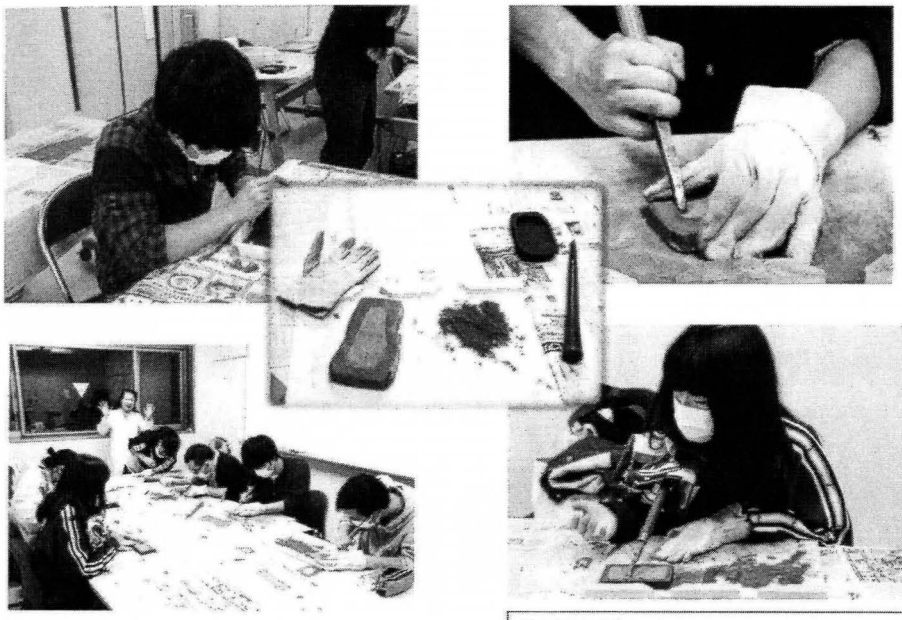
泉先生ご指導のもと、「硯彫り」と「磨き」の二つの工程を行いました。いざ制作してみると、ノミが大変頑固でなかなか上手く扱えませんでした。肩とノミの連動が難しく、真っすぐに進まない、力が入らないなどで苦戦しました。始めのうちは大胆に、細部は繊細に、という力加減のコツもつかみづらく、やっと彫り終えた際は肩がジンジンと痛みました。改めて龍渓硯が出来上がるまでの硯工の苦労を知り、その完成品の価値を感じました。

墨汁やプラスチック製の硯が普及している今日ですが、一つひとつ丁寧に、思いを込めて作られた龍渓硯を、より多くの人に知ってほしいと思いました。

硯制作に初挑戦


ヤスリがけ後の硯

硯制作の様子



革手袋はケガ防止のため、
マスクは彫って出た粉を吸い込まないために着けています。

今回の展示発表に関して、

・高遠高校　泉逸男（号　石心）先生
・翠川堂硯店　翠川ゆり子　様
・辰野高校　松川浩子　先生
・信州大学教育学部　竹下欣宏　先生
・辰野町役場

以上の皆さまから、辰野町での実地調査、龍渓硯に関する情報や資料の提供、硯制作においてのご指導や仕上げの工程など、多くのご支援ご協力をいただきました。書写書道教育研究室一同、心より感謝申し上げます。

この展示発表は、
平成二十七年度　信州アカデミア事業ＣＯＣ研究教育補助
の補助を受けて実施しています。

６．おわりに　―当該授業を受講した学生の感想（原文のまま）―

○「〔前略〕

龍渓硯の特別授業を通して、私は書写書道教育研究室に所属しほぼ毎日のように筆、紙、墨、そして硯に触れているにも関わらず、今まで特別関心をもっていなかったことに気が付きました。それは、「道具に愛着を持っていない」「どれを使っても同じだ」という考えを抱いているのではなく、それぞれの道具にどのような歴史があり、またどのように制作され私たちが使っているのか等を考えたことがなかったのを意味します。よって今回、授業の一環として辰野町に龍渓硯のお話を翠川さんにお聞きすることができ、本当によかったです。また、その後私たちに硯制作のご指導をしていただいた泉先生にも本当に感謝しています。硯制作をして、いかに一つの硯を作り上げることが大変であるかを実感しました。

さらに、翠川袈裟美さんが実際に硯を制作する映像を見て最も衝撃を受けたのは、採石し割った段階でどのような硯の形になるか決まるということでした。それは単なる「技術」という言葉に収められるものではなく、何十年という長い年月の経験から成せるものだと感じました。

翠川さんのお話から、現在龍渓硯を制作しているところはほとんどなく、その歴史と技術が途絶えてしまうかもしれないことを知りました。確かに、小学校の書写の時間に用いられる硯は軽く子どもたちにも扱いやすいという理由からプラスチックの素材で作られたものが多く石の硯の需要は減少していると言えます。私自身は、龍渓硯が途絶えてしまうことを直接止めるのは難しいですが、将来子どもたちに本物の硯を見せ、墨を実際に磨る活動を行っていきたいと思いました。（後略）」

○「〔前略〕

翠川さんの工房を見学させていただき、硯という芸術を知ることができた。一般的な形から彫刻が施されているもの、生物を象っているものなど様々。「書道用具」ではなく「鑑賞品」としてコレクションしている人もいるらしいが、使い手のことも考えられた硯を、飾っておくだけではもったいないと思った。龍渓石ならではの鋒鋩のきめ細やかさ、こぼれないようにと海を深く彫ってくれた翠川さんの思いやり、それらを活かすための書道をしてほしいと思う。実際自分が使うことになったら、高価ゆえ手が震えてしまうかもしれないが。

いざ自分たちが制作してみた時、鑿の扱いにくさに驚いた。映像の中の翠川さんは、すいすいと鑿を動かし、まるで初めから形が決まっていたかのように、あっという間に完成させた。実際の石は相当硬く、肩の骨がえぐれそうであった。泉先生の多大な補助のおかげで、やっと彫れた時には達成感が大きかった。肩と支える腕の力、細部を見極める目が必要で、様々な体力を消費した。

龍渓硯制作の様子から、自然がなくては成り立たない、全てが無二の硯なのだと知った。自然の恵みとそれを生かす職人がいて初めて成り立つ龍渓硯。その価値をつくづく感じ、また、なくしてはいけないという使命感が沸いた。自分が職人になることはできないが、せめて多くの人にこの芸術を知ってもらいたいと思った。今回行う卒業書道展で、少しでも広まることを願っている。」

【本稿参考資料】
- 「信州 龍渓硯」（龍渓硯振興会事務局作成パンフレット）
- 「龍渓硯」龍渓硯本舗 翠川堂
  （龍渓硯振興会作成パンフレット（平成 25 年度地場産業活性化戦略支援事業支援））
- 「平成 22 年度長野県デジタルアーカイブ推進事業 龍渓硯」（辰野町制作 DVD　2010）